

[原著論文]

## ウィリアム・アダムズの日本人妻 ——その出自と名前をめぐる——

森 良和

### 要 約

ウィリアム・アダムズ（三浦按針）の日本人妻の人物像については従来ほとんど踏み込んだ研究はなされていない。史料がごく限られるからである。しかし、これまでは特に吟味されることなく、夫人の出自と名前が「馬込勘解由の娘おゆき」とされることが多かった。本稿では主に当時来日していた西洋人の記録を検証しながら、これらについて改めて考察し、自身の見解を示していく。

キーワード：ウィリアム・アダムズ, 日英交渉史, 江戸時代初期

### 1 はじめに—本稿の論点

ウィリアム・アダムズに関する伝記や評伝、および彼をモデルにした小説は数多い。周知のとおりアダムズは1600年4月にオランダ船リーフデ号で日本に来航し、まもなく徳川家康に重用されて江戸の住居や三浦半島逸見の知行地を与えられ、当時の外国人としては破格の旗本扱いという厚遇をうけた。「三浦按針」の日本名で呼ばれたこともよく知られている<sup>1)</sup>。当初アダムズは妻子の待つ故国イギリスへの帰国を望んだが、結局願いが実現することはなく、平戸で死去するまでの20年間を日本で過ごした。その間日本でも妻を迎えて2子をもうけている。

しかしアダムズの日本人妻の人物像については史料的制約から出自や名前も含めてほとんどわかっていない。それにもかかわらず、アダムズ関連の著書の多くが妻の出自と名前を「馬込勘解由の娘おゆき」としている。インターネットでもそのように書かれたサイトが目立つが、これもそれらの著書を踏襲しているのであろう。ウィキペディアでもこの見解が採用されているせい<sup>2)</sup>、アダムズにちなんだ行事には妻「おゆき」に扮した女性が登場するなど、既成事実化している感さえある。

確実な一次史料が存在しないのになぜそうした通説が流布しているのであろうか。管見の限り、従来これについて踏み込んだ研究はほとんどない。本稿ではこうした問題提起から以下の

二点、すなわちアダムズ夫人は「馬込勘解由の娘」か、および、アダムズ夫人の名は「おゆき」かについて検証していく。

なお、本題に入る前に論点に関する説明を若干加える。

アダムズ夫人の「馬込勘解由の娘」説が広まったのは早世した明治期の歴史家菅沼貞風によってである。平戸生まれでマニラ滞在中わずか25歳で客死した菅沼は、その書で「アダムズ嘗て江戸に於いて馬込勘解由の女を娶り二子を生む。長子名はジョウセフ終ふる所を知らず、馬込また寛永十一年七月十六日歿せしかばアダムズと同處に葬る。」と述べている<sup>3)</sup>。ここではその根拠も夫人の名も述べられていないが、同書が刊行される4年前の「横須賀新報」にも同様の記事が載っているのも、菅沼はそれを踏襲したかもしれない<sup>4)</sup>。もっとも、菅沼と「横須賀新報」とでは「馬込勘解由の女（むすめ）」以外のアダムズ関連事項の叙述にかなり相違があり、主たる典拠が異なると推定される。

一方、「おゆき」という名も史料的根拠に基づくものではないが、近年公刊されたアダムズ関係の著書のいずれにも夫人の名がそのように記されている。邦訳書も含め、西暦2000年以降に日本語で出された著書を調べると、例えばジャイルズ・ミルトンの『さむらいウィリアム』、クラウス・モンク・プロムの『按針と家康』、鈴木かほるの『徳川家康のスペイン外交：向井将監と三浦按針』などがアダムズ夫人を「おゆき」としている（後述の文献⑰、⑱、⑲参照<sup>5)</sup>）。なお、プロムと鈴木はアダムズ夫人が3通りの名で呼ばれたとしている。また、邦訳はされていないが、ゲイリー・P・リューブ『異民族間の情交：西洋人男性と日本人女性1543-1900』にも「馬込勘解由の娘おゆき」とある<sup>6)</sup>。では夫人の名が「おゆき」とされたのはいつからなのか。本格的なアダムズの関連書は19世紀中葉から出されているので、論者が入手できた範囲でそれらを発行年順に逐一チェックしながら探していきたい。なお、アダムズ夫人について述べられた一次史料は、アダムズと最も行動を共にしたイギリス商館長リチャード・コックスの大部の日記が大半を占めるので<sup>7)</sup>、随時それを援用しながら所論を進めていく。

## 2 「馬込勘解由の娘」説の検討—否定的要素

馬込勘解由とは、日本橋大伝馬町に屋敷を構えながら江戸時代全期を通じて公儀の伝馬と人足を管轄し、江戸と五街道を結ぶ通交責任者にして同町の名主も兼ねた要職で、この職は世襲され代々その名で呼ばれた。馬込家初代平左衛門の出身地は遠江国馬込村（現浜松市）と言われ、天正年間から徳川家康に仕えており、家康の江戸入府に帯同して新天地で伝馬役を務めることになった<sup>8)</sup>。大伝馬町に居を定めたのは江戸の大改造が行われた慶長十一年（1606年）からである。勘解由が江戸初期に管轄した人馬の数は不明であるが、寛文3年（1663年）の伝馬数は大伝馬町と南伝馬町（京橋）の両者を併せて5892匹、同じく人足数は2901人という<sup>9)</sup>。この半世紀前、すなわち江戸時代当初の人馬数はかなり少なくなるとしても、かなりの権勢を誇る職位にあったことは容易に想像がつく。

しかし、早くから家康に仕えたとは言え、西洋人がほとんどいない江戸で馬込勘解由のような要人が娘を素性不明の異国人に嫁がせるであろうか。20世紀前半に活躍した歴史家幸田成友はその検証のためかつて馬込家を訪れて古文書を探索したが、同家とアダムズ夫人の結びつきを裏付けるものは何も見つからなかったという<sup>10)</sup>。幸田は、同家に残された文書の大部分が失われているので同説については肯定も否定もできないとする一方、別の箇所では同説を「眉唾物」とし、夫人の出自を「微賤の出であったに相違ない」と述べるなど、事実上同説を否定している<sup>11)</sup>。

幸田の見解が出されて80年以上になるが、それ以後も「馬込勘解由の娘」説の根拠となる史料は見つかっていない。一方、同説を明確に否定する史料、すなわち、夫人が他の出自であることを示す記録もこれまで存在しない。しかし菅沼説に立ってアダムズ夫人を「馬込勘解由の娘」とした場合にはあまりに不自然や矛盾が多い。本稿は以下のいくつかの理由に基づきながら、改めて同説に対する否定的見解を提示するものである。

第一に、馬込家のみならず、江戸時代の日本側史料にアダムズの妻と馬込勘解由との関係がうかがわせるものが全く存在していない。近年江戸東京博物館が刊行した馬込勘解由に関する研究によれば、「勘解由」が「馬込」姓を名乗るようになったのは大坂夏の陣（元和元年、1615年）以後という<sup>12)</sup>。アダムズの息子ジョゼフは1616年4月に平戸のコックスに手紙を送っている<sup>13)</sup>、息子が識字年齢に達していることから判断すると、アダムズと日本人妻の結婚はそれより10年ほど前とみなされよう。ということは二人が結婚したときにはまだ正式な「馬込勘解由」は存在しなかったことになる。

もっとも、勘解由は「馬込」姓が公式に許される以前から出身村「馬込」の名で呼ばれていたともいう。そうであっても「大坂の陣の勝利から江戸に帰還する家康を、勘解由は浜松宿の馬込橋で人足500人を引き連れて迎えた<sup>14)</sup>と記されるほどの権勢を誇った馬込家が、異国の航海士アダムズを娘婿に迎えていたならば相当に世間の注目を集めることは疑いなく、何らかの言い伝えが残るであろう。アダムズについて記した江戸時代の文書には、「唐人」「明人」「朝鮮人」「三州出身」「鳥商い」など一見荒唐無稽な形容も含まれる<sup>15)</sup>。しかし、当時のアダムズの日本名、すなわち「安仁」「安針」「安信」などに関連する文書のどこにも馬込勘解由との結びつきを示唆するものはない。

第二の理由は、同様のことが同時代の西洋人による記録にも言えるからである。まず、アダムズと最も行動を共にしたりチャード・コックスの日記や書簡にも、馬込勘解由の存在を示唆する行がいったい見出せない。初代勘解由が大坂の陣から帰還する家康を迎えたという2年前、平戸にはすでにイギリス商館が開かれており、コックスが商館長に就任している。そのコックスは何度かアダムズらとともに駿府や江戸に参府し、アダムズ夫人にも数回会っている。もし馬込勘解由がアダムズの義父であったならば、彼らが江戸に到着、あるいは出立するときに義父として何らかの手助けをしたであろう。しかしその気配がいささかもないのはあまりに不自然である。

同様のことはコックスより数年前にアダムズを伴って駿河や江戸に参府したオランダ商館長ジャックス・スペックスや、イギリス人司令官ジョン・セーリスにも言える。スペックスは1611年8月に、セーリスは1613年9月に、それぞれ大御所家康と將軍秀忠に謁見した。その際スペックスは浦賀と江戸でアダムズ邸に宿泊し、セーリスは逸見でアダムズ夫人に会って贈物をしている<sup>16)</sup>。だが、彼らの紀行文にも馬込勘解由の存在をうかがわせる記述はまったくない。さらに、後述のようにコックスは一度だけ「アダムズの義父」に言及しているが、この義父が特別な地位にあった様子もうかがえない。

加えて、アダムズの江戸の住居は日本橋のすぐ近くにあったので、大伝馬町の馬込勘解由の屋敷とは非常に近い。コックスの日記からアダムズ夫人自身も何度か江戸の住居に滞在していたことがわかるが、近隣に住むはずの「父・馬込勘解由」がそのとき娘や孫たちの世話をした様子はない。要するにオランダ・イギリス両商館関係の文書に馬込勘解由がまったく登場しないことは、初めから「アダムズ夫人＝馬込勘解由の娘」説に無理があったと考えざるを得ない。

第三の理由は、上に述べたコックスの日記に唯一見える「アダムズの義父」の記述によるものである。1616年10月17日の条には、逸見のアダムズ宅に滞在したコックスが「アダムズの義父にブラムポート産の更紗を1反贈った」と記されている<sup>17)</sup>。ほかに何も説明がないので、これだけで義父の人物像を測ることはできないものの、このときコックスはアダムズの義父を特別視した様子もなく、また贈物がきわめてありきたりの品で他の家族との差が無いことは、義父が要人ではなくごく平凡な庶民であったと思わせる。先述のように、馬込勘解由が大坂の陣から戻る家康を迎えたのはこの前年のことであるが、この義父にそうした有力者のイメージはない。

一方、翌年には「アダムズ夫人の義父」とされる人物が夫人の手紙を携えて平戸のコックスのところにやって来たことが、以下のように1617年7月24日の条にある。

アダムズ夫人は、仁右衛門殿がわれわれの商品の売り上げ代金を携えて当地に向かっている、と書いてきた。これらの手紙はアダムズ夫人の義父 Mrs. Adams father in law に当たる老人に託されてきたが、この人は私に酒1樽と塩漬け魚3匹も持ってきた<sup>18)</sup>。

このときコックスはこの老人からアダムズの息子ジョゼフ、義妹マグダレーナ、その夫アンドレア、および伊達政宗の通詞トメからの手紙も受け取っているが、老人が「アダムズの義父」でも「夫人の父」でもなく「夫人の義父」となっているのは奇妙である。一般に「夫人の義父」とは「夫の父」、すなわち「舅」を指すが、この老人はアダムズの父ではありえない。おそらくこの「夫人の義父」は前年10月に会った逸見の「アダムズの義父」と同一人物で、書き誤りではなく、コックスが前年の訪問時に夫人の父と思い込んだのだろう。

しかし「妻の義父であるが夫の父ではない」とすれば、平戸までやって来たこの「老人」はアダムズ夫人とどのような関係なのか。以下の可能性などが考えられるし、これらの複合的な

状況もありえよう。

- ① 当時存命中であった夫人の母には再婚相手、すなわち夫人の「継父」がいた。
- ② 夫人にはかつて前夫がいたが、死別などの事情によりアダムズと再婚した。ただ、その後もかつての義父とは何らかの交流があった。
- ③ 夫人は元々ある家の養女とされ、その養父をコックスが「義理の父」とした。

いずれにしても、この老いた「義父」が浦賀か逸見あたりからはるばる平戸まで旅してきたとすれば、相当に旅慣れていることは疑いない。壮年で頑強なアダムズでさえ、その旅程を踏破するのにほぼ1ヶ月を要しているからである。このことはその老人が通交関係の仕事に携わっていた（あるいは、いる）ことを推測させるので、馬込勘解由と何らかの結びつきがあるかもしれない。

また同じ日記の1617年9月7日の条には、「浦賀の老人」が大坂の手前22リーグにあるタカサンガ（高砂、現兵庫県高砂市）から大坂滞在中のコックスにアダムズの手紙を持参したと記され、さらに同年11月25日の条には平戸のコックスがアダムズの従者ジェンケセ（善吉）から江戸発信の手紙を数通受け取り、それらの差し出し人がアダムズ夫人、その姉妹、一老人、ヤダイエ（弥太夫）であったとしている<sup>19)</sup>。いずれの手紙も内容はわからないが、この「一老人」が高砂に滞在していた「浦賀の老人」で、かつ既出の「アダムズ夫人の義父」「アダムズの義父」と同一である可能性は高い。だが老人自身が馬込勘解由であるとは考えられない。江戸の要職にある者がかくも遠方まで手紙や贈答品を携えて単身やって来るはずはないからである。いずれにしても、アダムズ夫人に「父」あるいは「義父」と呼ばれる人物がいたことは疑いないが、有力者ではなかったであろう。

第四の理由は、幸田成友や岡田章雄も述べているように、現代とは比較にならないほど外国人への偏見が非常に強かったこの時代、たとえアダムズが家康に重用されているとしても、江戸で要職に就いている者の娘が素性のまったく不明な異国の船員と果たして縁組するであろうか、という疑問である<sup>20)</sup>。偏見や好奇の目にさらされることが予想されるので、嫁がせる側にも相応の覚悟が必要であったであろう。事実、来日した西洋人たちは行く先々で様々な嫌がらせを受けている。

例えば、前出の司令官セーリスは、1613年夏にアダムズらと平戸から駿府まで参府した途上博多に上陸したが、多数の子どもや柄の悪い連中が周りにたかって後に付きながら、口々に「コレ、コレ、ココレ、ワレ（高麗、高麗、悪い）」と囃し立てていたので、その騒がしきで話も聞き取れないほどであり、これは日本全国を通じてそうであったとしている。さらに帰路に伏見でも同様のことがあり、「トージン、トージン（唐人）」とか「コレ、コレ」と叫びながら一行の後に付いて来て、なかには石を投げつけてくる者さえいたが、市内の最も謹厳な人たちさえこれを咎めるどころか、むしろ鼓舞していたと記している<sup>21)</sup>。

他にも同様の例がある。堺でビジネスをしていたリーフデ号の生き残り船員メルヒョール・サントフォールトは、大坂夏の陣が迫っているとの噂が広まって長崎に転居する決心をしたと

き、長崎には西洋人が多いので、堺のように人々につきまとわれて囚人のような生活をしないで済むことを喜んでいる<sup>22)</sup>。コックスも、1617年9月に伏見から平戸に宛てた手紙で、参府旅行の途中朝鮮人と間違えられた一行が、敵意むき出しに砂や砂利をばらまかれた不快な体験を語っている<sup>23)</sup>。当時の国際結婚としては「国姓爺」として有名な鄭成功の母(平戸藩武家の娘)の例があるが、ポルトガル人・スペイン人商人ら西洋人と結婚した日本人女性の例は聞かない。

以上のように、日本側にもイギリス側にもアダムズと馬込勘解由とのつながりを示す同時代史料がまったく存在せず、わずかに史料に登場する「アダムズ夫人の父」も要人らしきとはほど遠く、また西洋人が極度に偏見の目で見られていた時代であったことを考え合わせると、菅沼らの記述には大きな疑念を抱かざるをえない。では菅沼らが誤解していたとすればそれはなぜであろうか。

幸田成友は「三雲屋」と「馬込」を取り違えた可能性を指摘している<sup>24)</sup>。三雲屋とは江戸におけるイギリス商館のビジネスを一手に引き受けていた商人で、商館員の寄宿先でもあった。江戸駐在の商館員リチャード・ウィッカムが1614年5月22日付で平戸の商館長コックスに宛てた手紙には、「富裕で信用でき評判も良い、私の江戸での宿主ミクモヤ・ゲムドノ *Miqmoya Gemdono* と呼ばれる男に商品を託す」とある<sup>25)</sup>。「ミクモヤ・ゲムドノ」の「ゲム」の意味ははっきりしないが、「ゲンドノ」とすれば「源」や「玄」などが付いた名前とも考えられよう。三雲屋が日本橋界隈に住んでいたことや、両者の発音が似ていることもあって、この「ミクモヤ・ゲム」が「マゴメカゲユ」と混同された可能性はあろう。平戸イギリス商館関係の史料を集大成したアンソニー・ファリントンも著作『日本のイギリス商館』(未邦訳)の「注」で *Migmoy* (三雲屋) と *Magome* (馬込) を同一視している<sup>26)</sup>。

しかし、コックスが逸見で更紗を贈った「アダムズの義父」、および平戸まで手紙を届けに来た「アダムズ夫人の義父」はいずれも三雲屋ではない。なぜならば、コックスはこれらの記述以前に何度か三雲屋に言及しているので、彼ら(おそらく「彼」)が三雲屋ならばそう記すであろうし、文脈からして三雲屋とは思われないからである。コックスも三雲屋をアダムズの義父とはしていないし、つきあい始めた当初は三雲屋を鼻持ちならない打算家と思ひこみ、『君主論』の権謀術数で有名な16世紀初頭イタリアの著述家ニコロ・マキャヴェリの名を渾名につけているほどである<sup>27)</sup>。またコックスの日記には何度かアダムズ夫人の母も登場し、コックスはこの母にも布地などの贈り物をしているが、コックスはアダムズの義母についても要人の妻であるとしてはいない。

### 3 アダムズ夫人の出自—他の観点から

一方、アダムズ夫人が上流の出自であるとした記録もある。慶長遣欧使節がスペインのセビリャに滞在中、使節と面会したイギリス人使節ヴィクター・M・サックヴィルが1614年12月9日付で現地から本国高官に宛てた書簡に、「彼ら(慶長遣欧使節)は、かの地(日本)で上

流の婦人 a principall woman と結婚し、大領主 a greate Lord となったイギリス人アダムズという者について私に話してくれた」とある<sup>28)</sup>。アダムズが三浦半島逸見に知行地を与えられたことは疑いない。ただ、高々 250 石、小作人 90 人ほどでは「大領主」とは言い難いし、この「上流の婦人」（名前はない）という形容にも社交辞令と誇張が含まれているかもしれない。

なお、上の書簡にある「イギリス人アダムズという者」という何気ない表現にも注意が必要である。上述のように、当時の日本側史料ではアダムズを「安仁」「アンジ」「安針」などとしている。しかし、西洋人の人名を漢字の音で表したヤン・ヨーステン（耶揚子）やリーフデ号船長クワケルナック（果伽羅那加）のような例は「アダムズ」にはない。おそらく支倉常長ら日本人使節一行も「アンジン」は聞いてはいても「アダムズ」は知らなかったであろう。では現地で「アダムズ」の名を挙げたのはだれなのか。

慶長遣欧使節に同行して案内と通訳を務めたのは、来日して布教活動を行っていたフランシスコ会宣教師ルイス・デ・ソテロである。西洋人の人名に通じているソテロはイギリス人使節に「アダムズ」として伝えたであろう。ちなみに 1609 年秋に上総国御宿に漂着したスペイン船サンフランシスコ号の船長ファン・セビーコスは、日本から帰還して 20 年のちに著した回想記で「ギロラモ（英名ウィリアム）・ペレスと交渉したソテロ」を非難しているが、ファン・ヒルはこの「ペレス」をアダムズに比定している<sup>29)</sup>。とすれば、ソテロはアダムズと接触するうちに当然本名を知ったはずであり、多少はアダムズの私生活も知り、夫人の出自も聞き及んだ可能性がある。そのうえで「上流の出」としたならば全くの根拠のないことではないかもしれない。もし「上流」とすれば、武家か比較的富裕な商家か。

「馬込勘解由の娘」ではなく、さりとて「微賤」でもないとすれば、夫人の出自にどのような推測が可能であるか。論者は大正期に出された『日本橋區史：第四冊』の記述に大きな関心を持つ。その「三浦安針」の項には「家康はアダムズに勧め、江戸の馬込勘解由が寡婦某を斡旋して其の妻となしたれば…」とある<sup>30)</sup>。馬込勘解由は自身の娘ではなく、ある未亡人をアダムズに妻として紹介したのだという。典拠は示されていないものの、論者にはこの説の方がいろいろな状況との整合性が保てるように思える。

夫人が「上流の出」という説は一蹴できない。夫人は何度もコックスに手紙を出し、ときに夫アダムズのビジネスにも関与して、夫の死後もしっかり家督を支えている。一定の教養を身に付けて封建道徳に基づきながら内助の功を発揮している夫人像が浮かび上がる。また夫人がコックスから「ソロモンの絵画」を贈られたり<sup>31)</sup>、家康のキリスト教禁止令発布（1612-13）ののちも、浦賀の自邸にスペイン人聖職者を泊めてアダムズから注意を受けていることなどは<sup>32)</sup>、夫人がキリスト教徒であった可能性を示している。一族にも洗礼名を持った者が多い。

いずれにしても、母と暮らし、妹も身近にいたので、例えば身寄りのなくなった武家の女子が有力者の養女とされたような状況は考えにくい。また、夫人の「父」か「義理の父」、および大坂に滞在していた「浦賀の老人」が同一人物とすれば、この人物が馬込勘解由の下で通交関係の仕事に携わっていたことも考えられよう。夫人の「義理の父」という表現から、老人が

夫人の母の再婚相手であった可能性もある。比較的豊かな家に生まれながら、夫人は何らかの突発的な理由で父も先夫も亡くし経済的に困窮していたところへ、馬込勘解由と関わりのあった「義父」を通して、『日本橋區史』の言うようにアダムズとの縁談が持ち込まれたのかもしれない。

以上、アダムズ夫人に関するきわめて断片的な史料から夫人の出自を追ってみた。現存の史料ではこれ以上明らかにはならないが、『日本橋區史』(1916)は「横須賀新報」(1888)の記事から30年近く後に出されている。内容こそ異なるものの、両者とも馬込勘解由に触れているので、現在では失われている共通の史料に拠ったのだろう。一方、幸田成友の著書は1935年に出されている。この間1923年には関東大震災が発生し、日本橋区のほとんどは火災によって灰燼に帰している。そのとき「幻の史料」は消失したのだろうか。

#### 4 アダムズ夫人の名前—1970年以前の著作から

次に「おゆき(ゆき)」という名について検証する。

結論から言えば、以下に述べるように、上述のプラムらが挙げたアダムズ夫人の三つの名はいずれもアダムズをモデルに書かれた小説の夫人名から取ったもので、史料的根拠に基づくものではない。コックスの日記はアダムズ研究に不可欠な同時代史料であり、そこでは何度となくアダムズの日本人妻に言及されている。にもかかわらず、奇妙にもその名前を記した箇所は一切なく、ほとんどは単に「アダムズ夫人」としているだけである。夫妻の息子と娘、夫人の姉(か妹)とその夫らの名が全員洗礼名で挙げられているのとは対照的である<sup>33)</sup>。

また、アダムズ夫人に言及した同時代の日本側史料として、アダムズ従者の善左衛門が1618年12月(元和四年十月下旬)に江戸から平戸のコックスに発信した書状があり、「安仁内儀、子共たち、傳言被申候」との一文が見えるが、名前はない<sup>34)</sup>。当時の既婚女性は「(夫の名の)内儀」とだけ呼ばれることも多かったのだろう。ではなぜアダムズの日本人妻の名が「おゆき」に定着したのであろうか。参照できた限りでフィクションも含めたアダムズ関連の著作や関連記事を時代順に追ってみる。

アダムズの死から半世紀も経たないうちに、イギリス本国では早くもトマス・フルラー著『イギリス名士録』(未邦訳)にアダムズが載せられている<sup>35)</sup>。しかしここにはアダムズの事績がごく手短かに載せられているだけで、夫人についての言及はない。その後長く続いた日本の鎖国時代にイギリスやオランダでアダムズを扱った評伝や小説の類は、管見の限り見出せない。

200年以上にもわたる鎖国のブランクを経て、ようやく開国がなった直後の1861年、イギリスではすでにアダムズを扱った小説が出版されている。江戸時代末期1858年に日米修好通商条約が結ばれたのに倣って、日英間にも同様の条約が締結されたことを反映していよう。以下の①がそれであるが、これより以後1世紀間に出されたアダムズ関係の小説や評伝を発行順に列挙し、それらに登場するアダムズの日本人妻の出自と名前を確認する。なお、一部英文小説



(以下の①, ⑦, ⑧)については安藤義郎氏の先行研究がある<sup>36)</sup>。

- ① William Dalton, *Will Adams: The First Englishman in Japan*, London, 1861. 〈ウィリアム・ダルトン『ウィル・アダムズ：日本における最初のイギリス人』〉 小説 (未邦訳)

この小説は、アダムズとともにリーフデ号で来日したメルヒョール・サントフォールトの視点から語った展開となっている。元々細川ガラシャに仕えていたキリシタン女性「メアリ」が、紆余曲折の末にアダムズの妻になるという設定である (pp. 290-291)。「メアリ」はアダムズが故郷に残してきたイギリス人の妻の名でもあるが、作者が意図的にそうしたのかはわからない。本書は19世紀中葉にハクルート協会から出されたトマス・ランダルの研究書を基に創作したとみられるが、ランダルの書に夫人の紹介はない<sup>37)</sup>。

- ② 『横須賀新報：第六号 傳記』, 1888 (明治21) 年9月28日 新聞記事

ここには「初めアダムス氏の江戸に在住するや、傳馬町に、馬込勘解由なる者の女を娶り、二子を擧ぐと雖も、皆夭す、故に其祀絶ゆといふ」とある。本稿の「はじめに」に述べた菅沼貞風の説の出所であろう。菅沼同様、夫人の名は述べられていないし、依拠した史料も示されていない。なお、現在からすると内容に誤りが多く、例えば「(アダムス氏は) 紀州浦に漂着したチャリテー船の乗組員で、幕府に救助を請うたが、当時日本人は欧州人をはなはだしく憎んでいたので、朝鮮人と偽った」などとある。

- ③ Charles William Hillary, *England Earliest Intercourse with Japan: The First Englishman in Japan*, 1905. 〈チャールズ・ウィリアム・ヒラリー『最初の日英交流：日本における最初のイギリス人』〉 伝記 (未邦訳)

本書ではアダムズ夫人の名前や出自は述べていないが、古代ローマの叙事詩『アエネイス』になぞらえて、「彼(アダムズ)は美しいディドーを見出し、彼女は息子のジョゼフと娘のズザンナをもうけた」としている (p.9)。周知のように、アエネイスはトロイ戦争の落武者で地中海沿岸各地を放浪していた武将だが、カルタゴの女王ディドーと恋に落ちた。「ディドー」はアダムズの妻の名ではなく、「愛する人」の比喩で用いられている。原作のディドーは別れを悲観して自ら命を絶したが、もちろんアダムズ夫人がそのような運命をたどったわけではない。

- ④ 益田太郎『昔語日英同盟』1906 (明治39) 年 歌舞伎の演目

この作品は、創作される4年前に締結された日英同盟の一環でイギリス王室コンノート殿下が明治天皇にガーター勲章を謹呈するために来日した際、歌舞伎の演目として演じられた<sup>38)</sup>。船頭の娘「お通」が、徳川家康の計らいで自分たちの窮地を救ってくれた三浦按針の妻となる物語である。江戸初期におけるイギリス人男性と日本人女性の結びつきが「300年前の日英同

盟」というわけであろう。「馬込勘解由の娘」説は採っていない。

作者益田はケンブリッジ大学で学んだ経験もあり、劇作家として「益田太郎冠者」の名で知られるほか、実業家や貴族院議員としても活躍した。ちなみにこの演目について、殿下の随行員を務めたリーデスデール卿などは非常に好意的な論評を載せているが<sup>39)</sup>、一部日本人論者は「外国人と船頭の娘を江戸城の大広間において、畏れ多くも家康公の媒酌で結婚させる筋書など狂気の沙汰」と酷評している<sup>40)</sup>。

⑤ 加藤三吾『三浦の安針』明誠館書店, 1917 (大正6)年, 伝記

本書には「かくて將軍(家康)は安針を信任すること一層を加え、安針の望郷帰国を断念せしめんため江戸伝馬町の奉行なる馬込勘解由の女の天主教徒たりし者を安針の妻となすことを強いしめた、のみならず相州三浦郡逸見村に於て二百五十石の領地を与えて、八九十人の従僕を隷属せしめた」(同書172-173頁)とあり、名前はない。

⑥ 内山舜『アダムズと家康』磯部甲陽堂, 1926 (大正15)年, 小説

日本でも比較的早くからアダムズを主人公にした小説が出されていた。大正15年刊のこの小説ではアダムズ夫人の名を「妙(たえ)」としているが、これについて作者は「妻の名が不明では面白くないので、戒名(海華王院妙満比久尼)の一字から採った」(同書3頁)としている。

⑦ Richard Blaker, *The Needle Watcher*, London, 1932. (リチャード・ブレイカー『按針』) 小説(未邦訳)

主人公たる「パイロット」の妻の名として現れる。書名は「按針」の英訳とみなされ、物語のなかで按針は「マゴメ」の娘である「ビクニ」を妻に迎えている(p. 494)。ストーリーの最後に「パイロットの墓碑が建てられた隣には、14年後にビクニのものも建てられた」とあるのは、「ビクニ」が夫の死から14年後に他界した前記アダムズ夫人の戒名から採られたのであろう。

⑧ James A. B. Scherer, *Pilot and Shogun*, Tokyo, 1935. (ジェームズ・A. B. シェラー『パイロットと將軍』) 小説(未邦訳)

この物語でも「パイロット」アダムズが「マゴメ」の娘を妻にする設定であり、妻の名は「クリセンスマム *Chrysanthemum*」(「菊」の意)とされている。「お菊」ということだろう。両者の出会いは鎌倉の大仏付近で、これには按針を結婚させたい家康の計略があったのだが、按針は「クリセンスマム」の美しさに一目惚れするストーリーになっている(p. 70)。

⑨ Herbert Gowen, *Five Foreigners in Japan*, New York & London, 1936. (ハーバート・ゴー

ウェン『日本における5人の外国人』 小伝集（未邦訳）

本書は16世紀半ばに初めて日本に来た西洋人として種子島にやって来たとも言われるメンデス・ピントから、初代の米人日本公使タウンゼント・ハリスまでの、日本史に少なからぬ影響を与えた来日西洋人5人についての略伝であるが、アダムズもその一人に挙げられ、ここでも「マゴメの次女ビクニ」がアダムズ夫人とされている（pp. 129-130, 133-4）。上記⑦、ブレイカーからの引用と思われる。

⑩ Ethel Mannin, *With Will Adams through Japan*, London, 1962. 〈エセル・マニン『ウィル・アダムズと行く日本探訪』〉 案内書（未邦訳）

絵入りの少年少女向けの日本案内書でアダムズ夫人は「日本人高官マゴメ家の令嬢でカトリック教徒」となっている（p. 64）。最初に挙げたダルトンからの引用であろう。

以上のようにここに挙げた1960年代までのアダムズ関連書・記事（フィクション5点、ノン・フィクション5点）にはどれにも「おゆき（ゆき）」は登場しない。

## 5 アダムズ夫人の名前—1970年以後

⑪ 石一郎『海のサムライ』河出書房新社，1973年．小説

論者が参照できた歴史書や小説のなかで「おゆき」が登場するのは本書が初めてである。ここでは船奉行向井忠勝（将監）が家康の命を受けて馬込勘解由の娘おゆきをアダムズに嫁がせようとした、というストーリーになっている（同書119-120頁）。勘解由はイエズス会に入会したキリスト教徒であったともされている。では、石はなぜアダムズ夫人を「おゆき」としたのだろうか。

決定的な理由は不明だが、興味深いのは石がその8年後に『小説小泉八雲』を著していることである<sup>41)</sup>。英米文学者であった石はスタインベックやヘミングウェイなどアメリカ文学の翻訳や評論などに多くの業績を残した。そうした研究の延長であろうか、数奇な運命に導かれて日本で後半生を過ごし、故国に帰国することなく歿した二人のイギリス人三浦按針（ウィリアム・アダムズ）と小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、現在ではアイルランド人）の伝記小説も創作している。『小説小泉八雲』の最後部には八雲が代表作『怪談』を著すまでの経緯が述べられているが、中でも「ゆきおんな」については最も紙幅が割かれ、狩人の若者と結婚した「娘はユキと言い」とある（同書275頁）。石にはこの「ユキ」へのこだわりがあったのかもしれない<sup>42)</sup>。

⑫ 牧野正『三浦按針の足跡』サガミヤ，1979年．評伝

⑬ 同『青い目のサムライ三浦按針』黒船出版部，1980年．伝記

⑭ Makino Tadashi, *Blue-eyed Samurai*, Ito, 1983. ⑬の英訳

おそらく「おゆき」を定着させたのが、伊東市のアダムズ研究者牧野正が著した上記の三書である。⑫と⑬のアダムズ夫人についての記述はほぼ同じで、次のようにある。

(按針が) 向井将監の仲人で日本橋大伝馬町の名主、江戸城出入商人馬込勘解由の娘お雪と結婚し逸見の邸で住むことになった。ここで男の子ジョセフ、女の子スザンナが生まれている (⑫30頁, ⑬38頁)。

また、⑭は⑬の英訳書であり、この部分は⑭では次のように英訳されている。

through the good offices of Mukai Shogen he was married to Oyuki, daughter of Magome Kageyu, a marchant with the official warrant of purveyor to Edo Castle and also the headman of a neighbourhood called Ohtenma-cho in Nihonbashi, Edo. (pp. 40-41)

牧野自身が典拠を示していないので「お雪」の由来を確かめる術はないが、巻末の「参考書」欄には上記⑪の石の小説が挙げられているので、それを踏襲した可能性は高い。ただ牧野は「お雪」をキリスト教徒とはしていない。

論者は⑭の英訳書が結果的に「おゆき Oyuki」の拡散に決定的な影響を及ぼしたものと考え、おそらくこれ以後、欧文のアダムズ関連書の著者たちは日本語の史料を検証せず、牧野の英訳書を引用してアダムズ夫人の名としたのであろう。ちなみに下記⑯のコーは牧野の英訳書を引用しており、下記⑰のミルトンはコーの著書を参考にしている。下記⑳のリュープも「注」で牧野を引用している。

⑮ Richard Tames, *Servant of the Shogun: being the true story of William adams, pilot and samurai, the first English man in Japan*, Tenterden Kent, 1981. <リチャード・テイムズ『将軍の家来』評伝(未邦訳)>

この簡潔なアダムズ伝では、夫人の名が「マゴメ・カゲユ」そのものとなっている (p. 27)。牧野の英訳書が刊行される直前であることに注意したい。「おゆき」は登場しない。

⑯ William Corr, *Adams The Pilot: The Life and Times of Captain William Adams 1560-1620*, London & New York, 1995. 評伝(未邦訳)

本書でコーは、アダムズが平戸でもある女性との間に子をもうけたことに触れ、その子は「馬込勘解由の娘おゆきとの間にもうけた二人の子のどちらでもない」とし、さらに「アダムズが初めて馬込勘解由に会ったとき、彼は江戸伝馬町の伝馬通交の統括者であったが、従来言われてきたような武士階級の一員ではない」(p. 169)と述べている。コーは上記牧野正の英訳書(⑭)

を引用している。

⑰ ジャイルズ・ミルトン（築地誠子訳）『さむらいウィリアム：三浦按針の生きた時代』

原書房，2005年，132頁。Milton, Giles, *Samurai William: The Englishman who opened Japan*, New York, 2004. 評伝

本書では「アダムズはかなり前から馬込勘解由という役人の娘が気になっていた」「彼（馬込勘解由）は重要な役職にいたが、家柄がいいわけでも、社会的地位が高かったわけでもなかった」とし、その「娘お雪を恋人として選んだ」のは経済的理由でもコネでもなく「本当にお雪を好きになった」としている（p. 120）。作者ミルトンはこの章の注でコーの上掲書（⑯）を参考書に挙げているので、そこからの引用であろう。本書には小説的な脚色もかなりあり、前記「恋人として選んだ」は考えにくい。

⑱ クラウス・モンク・プロム（下宮忠雄訳）『按針と家康：将軍に仕えたあるイギリス人の生涯』出帆新社，2006年（原著1996年），85-86頁。伝記，原文はデンマーク語

本書には、アダムズが向井将監の助力で江戸城における家康5人のお抱え商人の一人馬込<sup>・</sup>甚解由（原文ママ）と知り合い、その養女お雪（オツ、ビクニとも伝えられる）と結婚する決心をした、とある。出典は上掲④の益田の脚本で、フィクションからの引用である。

⑲ 鈴木かほる『徳川家康のスペイン外交』新人物往来社，2010年。歴史書

本書では、先述のイギリス人外交官サックヴィルが本国に宛てた書簡からアダムズ夫人の名を「お雪とも、オツとも、ビクニとも伝えている」（59頁）とし、またコー（⑯）とプロム（⑱）を参考文献に挙げているが、サックヴィルの書簡やコーにはそのような記述はない。上のプロムからの引用であろう。

⑳ Gary P. Leupp, *Interracial Intimacy in Japan: Western men and Japanese women 1543-1900*, London and New York, 2003. 歴史書（未邦訳）

ここでは「1605年ころ、この航海士は日本人女性を妻にした。直近の史料によれば、彼女は〈おゆき〉という名で、東海道の公儀旅行者に伝馬を供する宿場日本橋伝馬町の名主馬込勘解由の娘である。」（p. 57）としている。出典は岡田章雄、牧野正、ロジャーズ、コーの各著書となっているが、岡田は前述のとおり同説に懐疑的である。

以上のように牧野の英訳が出版されるまで、アダムズの伝記や小説には特に根拠もなく夫人の名にさまざまな名が宛てられていた。アダムズ夫人が「おゆき」とされたのは石の小説からであり、多分に牧野がそれを用い、さらに牧野の英訳書が欧米人研究者に連鎖的に引用されたことによって史実と誤解され、夫人の名として一人歩きしたと見てよさそうである。特に

1990年代以降に出版されたアダムズの伝記類はほとんど夫人の名を「おゆき」としている。

では、なぜアダムズ夫人の名前が記されていないのだろうか。コックスの膨大な日記は1616年から1622年まで綴られており（ただし途中およそ2年の欠損がある）、そこにはアダムズ夫人が何度も登場し、アダムズの死後も含めて頻繁に夫人と手紙をやり取りしているだけでなく、数回会っていてもいる。しかし同日記に夫人の名が記された箇所はまったくなく、原語の表現こそ多少異なるものの、いずれも「アダムズ夫人」としか書かれていない。

夫人に元々日本名がなかったとは考えられないし、アダムズが意図的にコックスや周囲の者に妻の名を秘匿するよう求めたとも思えない。ただ、先述のとおり、当時の女性は「(誰々の)内儀」など、夫に隷従する存在として呼ばれていたことも多かった。ちなみに1620年5月、平戸で死期の迫ったことを知ったアダムズは、コックスらを立会人として遺書を認め、日本の二人の子どもたち、ジョゼフとスザンナに遺産を分与し、また22年前に生き別れた英国のメアリ夫人とその娘デリヴァレンスにも同様にしているが、まだ存命中だった日本の夫人に対する遺産分与はない<sup>43)</sup>。江戸初期の武家の妻は遺産分与されないのが常だったのである。逸見の知行地は息子のジョゼフに安堵されているので、「三従」の教えよろしく寡婦は息子に扶養されるものと考えられたのであろう<sup>44)</sup>。

そもそもアダムズはいつ日本人妻を迎えたのか。イエズス会の年報「1605年の諸事」には「その市内（江戸）と近くに7、8人のイギリス人とオランダ人が住んでいる。…彼らはその地の住人としてすでに住居と家族を擁している。」とある<sup>45)</sup>。個人名こそ挙げられていないがイギリス人はアダムズだけなので、アダムズはこのころすでに日本橋近くに住居を与えられ、妻と暮らしていたと思われる。旗本扱いのアダムズとの結婚を機に妻は名を表立って出されることなく、「安仁内儀」で通っていたのではないか。

アダムズ夫人の名と出自について新しい知見が加わるには、画期的な新史料の発見を待つしかないようである。

## 注

- 1) 現在では一般に三浦「按針」と表記されるが、江戸時代に「按針」と表記された例はなく「安仁」（異国御朱印状など）が多い。他に「安信」（『君臣言行録』）、「安針」（『三浦古尋録』）、「アンジ」（『異国日記』）などが見られる。
- 2) Wikipedia「三浦按針」, 2017年4月26日閲覧。
- 3) 菅沼貞風『大日本商業史』東邦協会, 1892年（明治25年）, 389頁。
- 4) 「横須賀新報：明治21年9月28日記事」, 『横須賀新報』横須賀新報復興刊行会, 1975年, 10頁。東京大学史料編纂所編『大日本史料：第十二編之三十三』東京大学出版会, 1974年, 〈以下『大日本史料』と略〉, 655頁。
- 5) ジャイルズ・ミルトン（築地誠子訳）『さむらいウィリアム：三浦按針の生きた時代』原書房, 2005年, 132頁。Milton, Giles, *Samurai William: The Englishman who opened Japan*, New York, 2004, p. 120. クラウス・モンク・プロム（下宮忠雄訳）『按針と家康：将軍に仕えたあるイギリス人の生涯』

- 出帆新社, 2006年, 85-86頁. Plum, Claus Munk, *Will Adams: Styrmand samurai: En englanders eventyrlige ferd til Japan 1598-1620*, Lyngby, 1996. 鈴木かほる『徳川家康のスペイン外交: 向井将監と三浦按針』新人物往来社, 2010年, 59頁.
- 6) Leupp, Gary Paul, *Interracial Intimacy in Japan: Western men and Japanese women 1543-1900*, London and New York, 2003, p. 57.
- 7) 東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料: イギリス商館長日記』東京大学出版会, 1978-1982年, 「原文編之上」「原文編之中」「原文編之下」「訳文編之上」「訳文編之下」「訳文編附録上」「訳文編附録下」の7巻からなる. 以下『イギリス商館長日記』と略.
- 8) 高山慶子「大伝馬町の馬込勘解由」, 江戸東京博物館編『大伝馬町馬込勘解由に関する研究』所収, 江戸東京博物館, 2009年, 51頁.
- 9) 東京市日本橋區役所編『日本橋區史: 第一冊』大正5年(1916年), 463頁. 寛文3年以前の馬(朱印伝馬・駄賃伝馬の合計)の匹数, 人足数は記されていない. なお, 江戸時代の馬の数え方は「頭」ではなく「匹」である.
- 10) 幸田成友『史話東と西』中央公論社, 1940年, 65-66頁.
- 11) 同書19頁, 66頁.
- 12) 高山慶子, 上掲8), 51頁.
- 13) 『イギリス商館長日記: 訳文編之上』352頁.
- 14) 高山慶子, 上掲8), 51-52頁.
- 15) 例えば『三浦古尋録』(文化9年=1812年成立)には「この唐人は日本橋に住し, 鳥を商い渡世してありしが, …此の唐人の墓安針町より再興供養あり」とある. 加藤山寿(菊池武他校訂)『校訂三浦古尋録』校訂三浦古尋録刊行会, 1967年, 19頁.
- 16) スペックスについては『大日本史料: 十二編之八』1970年, 668, 672頁参照. セーリスについてはジョン・セーリス(村川堅固訳, 岩生成一校訂)『セーリス日本渡航記・ヴィルマン日本滞在記』雄松堂, 1970年, 178頁参照.
- 17) 『イギリス商館長日記: 訳文編之上』541頁.
- 18) 『イギリス商館長日記: 訳文編之下』33頁, なおここでは『原文編之中』p. 130から拙訳を用いている.
- 19) 同書84-85頁, および159頁.
- 20) 岡田章雄『三浦按針』(岡田章雄著作集V) 思文閣出版, 1984年, 64頁.
- 21) セーリス, 上掲16), 163-164頁, 186頁.
- 22) 『大日本史料: 十二編之二十三』654-655頁.
- 23) Farrington, Anthony, *The English Factory in Japan 1613-1623*; London, 1991, p. 622.
- 24) 幸田成友, 上掲10), 67頁.
- 25) Farrington, ibd., p. 159. 岩生成一(訳注)『慶元イギリス書簡』(改訂覆刻版) 雄松堂書店, 1966年, 201頁.
- 26) Farrington, ibd., p. 1641 (index).
- 27) 『イギリス商館長日記: 訳文編之上』502-503頁
- 28) 『大日本史料: 十二編之十二』124頁(原文p. 99). Public Record Office (ed.), *Calendar of State Papers; Colonial East Indies 1513-1616*, London, 1978, pp. 349-50 (no. 820).
- 29) ファン・ヒル(平山篤子訳)『イダルゴとサムライ: 16・17世紀のイスパニアと日本』法政大学出版局, 2000年(原著1991年), 259頁. ロレンツ・ベレス(野間一正訳)『ベアト・ルイス・ソテロ口伝』東海大学出版局, 1968年(原著1924年), 27頁.
- 30) 日本橋區編『日本橋區史: 第四冊』大正5年(1916年), 582頁. なお, 同書『第一冊』644頁には「後(のち)馬込氏を娶る」とある. また『中央区史: 上巻』1359-1360頁には「家康の勧めに依り馬込勘解由の寡婦を妻って帰化し」とある.
- 31) 『イギリス商館長日記: 訳文編之上』540頁.

- 32) 『イギリス商館長日記：訳文編之上』497-499頁。
- 33) 『イギリス商館長日記：訳文編之下』965頁にアダムズ夫人親族の名前がある。
- 34) 『イギリス商館長日記：訳文編附録（上）』139頁。
- 35) Fuller, Thomas, *The worthies of England*, London, 1661.
- 36) 安藤義郎「ウィリアム・アダムズ（三浦按針）をめぐる三つの英国小説（その1）」、『経済集志（人文・自然科学編）：第43巻別号』日本大学経済学研究会，1973年。同「ウィリアム・アダムズ（三浦按針）をめぐる三つの英国小説（その2）」、『経済集志：第44巻第3，4号，別号合併号』日本大学経済学研究会，1974年。同「PILOT AND SHOGUNについて」、『経済集志（人文・自然科学編）：第45巻別号』日本大学経済学研究会，1975年。
- 37) Rundall, Thomas, *Memorials of the Empire of Japan in the XVI and XVII centuries*, London, 1850.  
なお、19世紀に欧米人が著した歴史書や論文でアダムズに焦点を当てたものが2点あるが、いずれも日本の夫人には言及していない（参考文献のR. HildrethとD. Boulger参照）。
- 38) 台本はこの物語が演じられる直前に「貴賓御覧の演劇」として、当時の新聞『時事新報』に3日連続で連載された（明治39年2月18，19，20日）。近年その復刻版が出されている。『時事新報（明治後期編）25巻～(2)』龍溪書舎，2010年，211，233，253頁。
- 39) Redesdale, Algernon B. F.M. *Transactions and Proceedings of Japan Society in London*, London, 1910. pp. 9-10
- 40) 岡田章雄，上掲20)，296-301頁にこの演目の粗筋と解説がある。
- 41) 石一郎『小説小泉八雲』集英社，1982年，275頁。
- 42) 筆者は幸いにも著者のご長男石太郎氏と連絡を取ることができたので、この件について尋ねてみたところ、一族や知人に「おゆき」の心当たりはないとのことであった。
- 43) 『イギリス商館長日記：訳文編附録（上）』105頁。
- 44) 『イギリス商館長日記：訳文編附録（上）』109頁。
- 45) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告』第I期第5巻，同朋社出版，1988年，28-29頁。

## 参考文献

- 安藤義郎「ウィリアム・アダムズ（三浦按針）をめぐる三つの英国小説（その1）」、『経済集志（人文・自然科学編）：第43巻別号』日本大学経済学研究会，1973年。  
同「ウィリアム・アダムズ（三浦按針）をめぐる三つの英国小説（その2）」、『経済集志：第44巻第3，4号，別号合併号』日本大学経済学研究会，1974年。  
同「PILOT AND SHOGUNについて」、『経済集志（人文・自然科学編）：第45巻別号』日本大学経済学研究会，1975年。
- 時事新報社『時事新報（明治後期編）25巻～(2)』（復刻版），龍溪書舎，2010年。
- 石一郎『海のサムライ』河出書房新社，1973年。  
同『小説小泉八雲』集英社，1982年。
- 岩生成一（訳注）『慶元イギリス書簡』（改訂覆刻版）雄松堂書店，1966年。
- 内山舜『アダムスと家康』磯部甲陽堂，1926（大正15）年。
- 岡田章雄『三浦按針』（岡田章雄著作集V）思文閣出版，1984年。
- 加藤三吾『三浦の安針』明誠館書店，1917（大正6）年。
- 幸田成友「馬込勘解由」、『経済学研究：四』所収，東京商科大学，1935年。  
同『史話東と西』中央公論社，1940年。
- リチャード・コックス，東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料：イギリス商館長日記』東京大学出版会，1978-1982年。
- 菅沼貞風『大日本商業史』東邦協会，1892（明治25）年。



- 鈴木かほる『徳川家康のスペイン外交』新人物往来社, 2010年.
- ジョン・セーリス (村川堅固訳, 岩生成一校訂)『セーリス日本渡航記・ヴィルマン日本滞在記』雄松堂, 1970年〈原著 Earnest Satow (ed.), 1900年〉.
- 東京都中央区編『中央区史』中央区, 1958年.
- 東京市日本橋區編『日本橋區史』東京市日本橋區, 1916 (大正5) 年.
- 東京大学史料編纂所編『大日本史料』(十二編之八, 十二, 二十三, 三十三) 東京大学出版会, 1972年.
- ファン・ヒル (平山篤子訳)『イダルゴとサムライ:16・17世紀のイスパニアと日本』法政大学出版局, 2000年〈原著1991年〉.
- ロレンツ・ペレス (野間一正訳)『ベアト・ルイス・ソテローロ伝』東海大学出版局, 1968年〈原著1924年〉.
- クラウド・モンク・プロム (下宮忠雄訳)『按針と家康: 将軍に仕えたあるイギリス人の生涯』出帆新社, 2006年〈原著1996年〉.
- 牧野正『三浦按針の足跡』サガミヤ, 1979年.
- 同『青い目のサムライ三浦按針』黒船出版部, 1980年.
- ジャイルズ・ミルトン (築地誠子訳)『さむらいウィリアム:三浦按針の生きた時代』原書房, 2005年.
- 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告』同朋社出版, 1988年.
- 横須賀新報社『横須賀新報』横須賀新報復興刊行会, 1975年
- Blaker, Richard, *The Needle Watcher*, London, 1932.
- Boulger, Demetrius, *The First English man in Japan*, in *Asiatic Quarterly Review IV*, London, 1887.
- Corr, William, *Adams The Pilot: The Life and Times of Captain William Adams 1560-1620*, London & New York, 1995.
- Dalton, William, *Will Adams: The First Englishman in Japan*, London, 1861.
- Farrington, Anthony, *The English Factory in Japan 1613-1623*, London, 1991.
- Fuller, Thomas, *The worthies of England*, London, 1661.
- Gowen, Herbert, *Five Foreigners in Japan*, New York & London, 1936.
- Hildreth, Richard, *Japan as it was and is*, Boston, 1855.
- Hillary, Charles William, *England's Earliest Intercourse with Japan: The First Englishman in Japan*, 1905.
- Leupp, Gary P., *Interracial Intimacy in Japan: Western men and Japanese women 1543-1900*, London and New York, 2003.
- Makino, Tadashi (trans. Simon Grove), *Blue-eyed Samurai*, Ito, 1983.
- Mannin, Ethel, *With Will Adams through Japan*, London, 1962.
- Milton, Giles, *Samurai William: The Englishman who opened Japan*, New York, 2004.
- Plum, Claus Munk, *Will Adams: Styrmand, samurai: en englanders eventyrlige ferd til Japan 1598-1620*, Lyngby, 1996.
- Public Record Office (ed.), *Calendar of State Papers; Colonial East Indies 1513-1616*, London, 1978.
- Redesdale, Algernon B. F-M., *Transactions and Proceedings of Japan Society in London*, 1910.
- Rundall, Thomas, *Memorials of the Empire of Japan in the XVI and XVII centuries*, London, 1850.
- Scherer, James A. B., *Pilot and Shogun*, Tokyo, 1935.
- Tames, Richard, *Servant of the Shogun: being the true story of William adams, pilot and samurai, the first English man in Japan*, Tenterden Kent, 1981.

## William Adams' Japanese Wife: On Her Descent and Name

Yoshikazu MORI

### Abstract

The human image of the Japanese wife of William Adams has not been clarified yet. That is because the historical materials on her are only few. But so far it has long been said that she is the daughter of Magome Kageyu whose name is *Oyuki*, and its authenticity has not been checked. On this paper I research this mainly using the records which are written by the western people in that age, and present my own view.

**Keywords:** William Adams, Japan-United Kingdom relations, early Edo era